

調査報告

鹿児島県のマンゴー加温栽培における チャノキイロアザミウマの系統別発生消長

鹿児島県農業開発総合センター果樹・花き部 みや じ かつ ひこ
鹿児島県大島支庁徳之島事務所農業普及課 にし なほ こ
西 菜穂子

はじめに

マンゴー *Mangifera indica* L. は、ウルシ科マンゴー属の果樹で、原産地はインドからインドシナ半島周辺とされる。マンゴーの栽培は古く、BC2000年にはインドで栽培されていたとされている (JIRCAS, 2017)。世界の地域別に見ると、インドや中国といった起源地周辺の南・東南アジアで多く生産されており、これらの地域において現在でも重要な果樹となっている。日本にマンゴーが持ち込まれたのは、明治時代の半ばとされているが、1980年代のハウス栽培の導入により安定して果実をつけることができるようになり、国内マンゴー生産の第一歩が踏み出されたようである (JIRCAS, 2017)。国内の栽培面積は421 haで、本県は全国の約16%栽培されている。収穫量は沖縄県、宮崎県に次いで全国第3位

である (農林水産省, 2015)。2008年以降の国内の栽培面積の推移を見ると、栽培面積は安定して推移している (図-1)。

本県のマンゴー栽培は、主にビニルハウスや硬質プラスチックハウスで行われており、県本土と熊本地域では加温栽培、奄美地域では無加温栽培である。収穫時期は加温栽培が4月から始まり、無加温栽培の8月までと幅広い。

チャノキイロアザミウマ *Scirtothrips dorsalis* Hood (以下、チャノキイロ) は多数の植物に寄生し、チャヤカンキツ類、カキ、ブドウ等の害虫として知られている (西野・小泊, 1988)。マンゴーでは新梢、新葉および幼果などの柔らかい組織を加害し (図-2, 3, 4)、果実の商品価値を低下させるため (仲宗根ら, 1996; 山口, 2007)、本県でもマンゴーの重要害虫として位置づけされてい

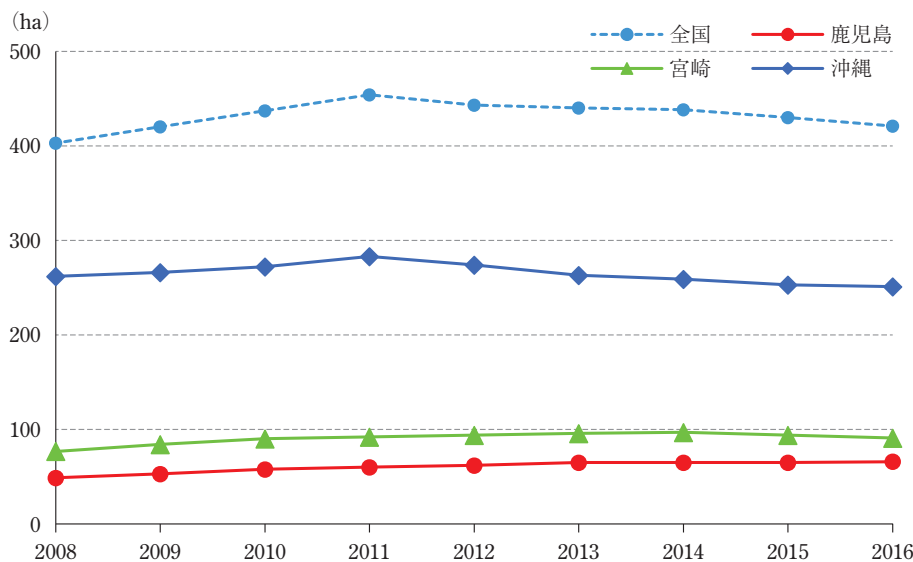


図-1 マンゴー栽培面積の推移 (特産果樹生産動態等調査より抜粋)

Seasonal Prevalence of Two Strains of *Scirtothrips dorsalis* Hood in Mango Greenhouse in Kagoshima Prefecture. By Katsuhiko MIYAJI and Nahoko NISHI

(キーワード: チャノキイロアザミウマ, マンゴー, C系統, YT系統, 鹿児島県)